NPO 法人岡崎がくどうの会

第 58 回全国学童保育研究集会(20231104~20231105)レポート

【クラブ】(つくしクラブ)

【名　前】(西村 巧)

①　2 日目に参加した分科会のタイトルをお書きください。

『第(13)分科会（指導員の職場づくりと指導員組織)』

②　この分科会を選んだ理由をお書きください。

『終活に向け後世に残せるものを学ぶため』

③ 2 日間の全体会と分科会で心にのこったことや気づいたことや学んだこと、今後の実践に活かしていきたいことなど、感想もふくめてお書きください(自由記述)。

何年かぶりの現地開催の「全国学童保育研究集会」IN 神奈川。
コロナに翻弄された数年を取り戻すべく現地に赴き教えを乞う。
活気づいた都市部に活気づいた学童保育関係者はわざわざ現地まで足を運んで教えを乞う。
今回の分科会には講師がいない。
よく理解していなかった。

専門的なお話を傾聴しおしまいかと思いきや、2 人の世話人を面前に、参加した各々の「意見交換会のような図式」が広がることが容易に想像できた。
開始時間。この流れでいくにはあまりにも普通過ぎる自己紹介からはじまる。
40～50 人程度の参加者に、1 人に与えられたであろう時間はせいぜい 1 分といったところか。
そんな読みとは裏腹に日本全国から集まった兵たちはここぞとばかりに己に置かれた境遇を時間配分無視で赤裸々に語る。

いずれかは発言者になる、今は観衆の隣人の賛同する声や嘆嗟。
いずれかは注目を集める、今はその他大勢の中の自分のどこか冷めた深層。

老若男女、それぞれの立ち位置の悩みは多分ベクトルとベクトルの幾何学模様。
しかしながら人と人の関わりがこの仕事の真髄であるならば特化したベクトルの方向を曲げることもまた一つの解決策。
意見の交換会にはそういった重要な要素も多々含まれている。

「そうそう」「わかるわかる」の傷の舐めあいは余程で飽きている。
そんな境遇を語って「私はすごいでしょ？」の自慢大会も余程で飽きている。

答えの見つからなかった兵は自分よりも厳しい境遇の同志を目の当たりにするのも実は一つの答えだったりする。

そんな状況を分析しながら冷静に見つめている自分の境遇は？と問われれば・・

これは常々思っていることだから特に襟を正して言うこともないが、これからは若手の時代。これはここの職場に限らずどこの世界でもだ。
だったら僕ら年寄りの役目はその若い世代が困らないように前へ押し出し、舞台の主役となれるように淡々と手助けをするだけ。
若手はそんな年寄りをぞんざい扱うことなく良かれと思ったところは吸収し、良くないと思えば語り合えば良いと思う。
そこをお互いに理解して「おらが指導員組織」のコミュニティーを構築していけばよいと思う。

講師のいない「分科会」は初めてだったがこういった形の意見交換会は様々な地域の情報ややり方、人間関係などもしっかり聞けるのでそういった意味では面白いのかもしれないと思った。

「みんなそれぞれの立場で頑張っていってもらいたいものだ。」

・・・と結局偉そうな立場でまとめる年寄りはちゃんと「若手を手助けだけできるのか？」と、反省してみる。